九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

最澄の宇佐神宮参詣説話について：『直談因縁集』四ー三〇話を中心に

森，誠子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/19779

出版情報：語文研究. 108/109, pp.54-66, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

最澄の宇佐神宮参詣説話について

――『直談因縁集』四―三〇話を中心に――

森　誠子

一、はじめに

中世の天台教学の談義・唱導と説話の生成・変容について、関東の談義所寺院や、学僧の活動実態の研究成果が近年多く報告され、その様相が明らかとなりつつある。(注1) しかしそれらは、当時多くの談義所が存在していた東日本、その中でも特に関東を中心とした報告が多くを占める。確かに、直談系の法華経注釈書所収の説話も、その舞台を関東や近畿地方とするものが多く、特に九州地方に纏わる説話となると数が少ない。そのような中で、日光輪王寺天海蔵『直談因縁集』(注2) 所収の伝教大師宇佐神宮参詣説話は、一般的に知られるものと内容が大きく異なっており、説話の変容と享受を解明する上で、大変興味深い資料であると思われる。

そこで本稿では、北部九州に纏わる最澄の宇佐神宮参詣説話が、どのように変容し享受されていったのか、諸書に見える類話を比較しながら考察を行っていく。具体的には、文献(古典)説話や高僧伝などに散見される最澄の宇佐神宮参詣説話について、中央と在地の資料のそれぞれを整理しながら、本説話が、後に直談系の法華経注釈書の中に変容し取り込まれていく様相の解明を目指したい。

二、宇佐参詣説話の概要

まず、最澄の宇佐神宮参詣説話について、一連の説話を通観した上で、説話の要素が一番整理されていると思われる

『今昔物語集』巻十一第十話「伝教大師亘宋伝天台宗帰来語」(注3)より、その該当箇所を引用する。

而ルニ、唐ニ渡ラムト為シ時ニ、先ヅ、宇佐ノ宮ニ詣テ、「道ノ間、海ノ怖レ無クシテ平カニ渡シ給ヘ」ト、祈ロ申シ給ケルニ、思ノ如ク彼ノ国ニ渡リ着テ、天台ノ法文ヲ習伝ヘテ、延暦二十四年ト云フ年帰朝スルニ、其喜ビ申サムガ為ニ、先ヅ宇佐ノ宮ニ詣デ、御前ニシテ礼拝恭敬シテ、法華経ヲ講ジテ申サク、「我レ思ノ如ク唐ニ渡リ、天台ノ法文を習ヒ伝ヘテ帰リ来レリ。今ハ比叡山ヲ建立シテ多ノ僧徒ヲ令住メテ、唯一無二ノ一乗宗ヲ立テ、有情非情皆成仏ノ旨ヲ悟メテ、国ニ令弘シ。仏ハ薬師仏ヲ造奉テ『一切衆生ノ病ヲ令愈メム』ト思フ。但シ其願、大菩薩ノ御護ニ依テ可遂キ事ナリ」。

其時ニ、御殿ノ内ヨリ妙ナル御声有リ。示シテ宣ハク、「聖人、願ヘル所極テ貴シ。速ニ此ノ願ヲ可遂シ。我レ専ニ護リヲ可加シ。但、此ノ衣ヲ着テ薬師ノ像ヲ可造奉シ」トテ、御殿ノ内ヨリ被投出タリ。是ヲ取テ見ルニ、唐ノ絹、滋ク紫ノ色ニ染テ、綿厚ク□タル小袖ニテ有リ。是ヲ給リテ、礼拝シテ出ヌ。其後、返テ比叡山ヲ建立スルニ、彼ノ浄衣ヲ着テ、自ラ薬師像ヲ造奉レリ。

『今昔物語集』巻十一第十話は、最澄によって天台宗が招来されたことを記したものである。その中で、比叡山を建立し薬師像を造るに至った契機として、最澄が、唐から帰朝し、渡海安全の祈願をした宇佐神宮にお礼参りをした際、法華経を講じて、国内の布教活動における大菩薩の加護を願ったところ、御殿の内より願いを聞き入れた旨を伝える声が聞こえ、与えられた衣を着て薬師の像を造るよう命じられ、小袖を賜ったということが記されている。

一方、『直談因縁集』四―三〇話では、最澄の宇佐神宮参詣説話は、次のように記されている。(私に本文を書き下し、送り仮名等を補った場合は括弧を付した)

一、宝塔現(ルル)ニ付(キ)テ。伝教大師、九州豊前(ノ)国、宇佐八幡ノ宝前ニシテ、法花(ヲ)講(ジ)玉フニ、辺(リ)ノ草木等、ナリ亘ル。アヤシムルニ、宝塔現(ル)。見レハ、金色ノ仏、居玉フ也。聴衆モ之(ヲ)拝シ、殊勝ニ存(ズ)ルニ、軈テ化シテ失ス、ト云々。

このように『直談因縁集』では、最澄が宇佐神宮を参詣した目的については記されず、また最澄が法華経を講じると草木

が感応し宝塔が出現したとするなど、『今昔物語集』とは大きく話の内容が異なっている。

『直談因縁集』は、法華経二十八品の順に従い、『法華経』の教えをわかりやすく、その実証例として説話を用いながら記されたものである。そのため、法華経の「見宝塔品」の教えを伝えるのによりふさわしい内容に変容したものであることがわかるのだが、古くからある最澄伝説に、なぜこのような宝塔の話が結びついていくのか、その背景には、どのような最澄の宇佐神宮参詣に纏わる言説や事柄があったのか、検証していきたい。

三、説話の比較

まず、最澄の宇佐神宮参詣説話を記した文献について、その内容の異同を知るために、次に示すような（イ）～（ヘ）の項目により整理して比較を行った。

（イ）年号
・甲（延暦二十四年と、帰朝した年を記したもの）
・乙（弘仁五年と、宇佐神宮に参詣した年を記したもの）
・×（記述なし）

（ロ）法華経を講じる
・○（記述あり）　・×（記述なし）

（ハ）草木の感応
・○（記述あり）　・×（記述なし）

（ニ）宝塔の出現
・○（記述あり）　・×（記述なし）

（ホ）託宣を受ける
・甲（金色の仏の出現と託宣）
・甲’（金色の仏の出現のみ）
・乙（託宣により衣を賜る）
・乙’（託宣のみを受ける）
・乙”（衣を賜るのみで託宣は受けていない）
・×（記述なし）

その結果を【表一】～【表四】として示す。(注4)

【表一】『直談因縁集』

文献名	（イ）	（ロ）	（ハ）	（ニ）	（ホ）
直談因縁集	×	○	○	○	甲’

【表二】古典（文献）説話

文献名	（イ）	（ロ）	（ハ）	（ニ）	（ホ）
三宝絵　下	甲	○	×	×	乙”
今昔物語集　十一―十	甲	○	×	×	乙
宝物集　巻七	×	○	×	×	乙
水鏡	乙	○	×	×	乙
古今著聞集　二―三九	乙	○	×	×	乙

【表三】大師伝・比叡山関連文書など

文献名	（イ）	（ロ）	（ハ）	（ニ）	（ホ）
伝教大師伝	乙	○	×	×	乙
比叡山延暦寺元初祖師行業記	乙	×	×	×	×
伝教大師行状記	乙	○	×	×	乙
叡山大師伝	乙	○	×	×	乙
法華験記　上―三	甲	○	×	×	乙”
拾遺往生伝　上―三	乙	○	×	×	乙
日本高僧伝要文抄	乙	○	×	×	乙
私聚百因縁集　七―六	×	○	○	×	乙
元亨釈書　巻一	乙	○	×	×	乙
叡山要記　上（鎮西寵門山）	乙	○	×	×	乙”

【表四】八幡宮関連文書

文献名	（イ）	（ロ）	（ハ）	（ニ）	（ホ）
僧綱補任抄出	乙	○	×	×	×
宮寺縁事抄	乙	○	×	×	乙
東大寺八幡験記	乙	○	×	×	乙
八幡宇佐宮御託宣集	乙	○	×	×	㊀
宇佐宮年中斎会法文案	乙	○	×	×	×

まず【表一】『直談因縁集』についてであるが、（イ）の項に×とあるように、年号については記載されていない。そして（ロ）から（ニ）については全て記されている。さらに（ホ）については、金色の仏による託宣はなく仏が出現したことをのみ記している。

これに対し【表二】古典説話の類では、（イ）より参詣した年が延暦二十四年から弘仁五年へと、最澄が宇佐神宮に参詣した年が明記されるようになったことがわかる。[注5] また、（ロ）から（ニ）については、全てにおいて、最澄が御前で法華経を講じたことを記しているが、草木の感応と宝塔の出現ということは記していない。そして、『三宝絵』を除く全てにおいて、若干の記述の違いはあるが、最澄が託宣により衣を授かったことを記している。

次に【表三】大師伝・比叡山関連文書などについては、まず（イ）より、年号の記載のない『私聚百因縁集』と、最澄の帰朝した年を記す『法華験記』を除き全て、最澄が宇佐神宮に詣でた年の弘仁五年を記している。そして『比叡山元初祖師行業記』は、最澄が弘仁五年に宇佐神宮に詣でたことのみを記述し『法華験記』は（ホ）に「乙」とあるように特に託宣を受けたという記述は見られない。とはいえ、若干の記事の異同はあるものの、概ね大師伝や高僧伝の類は、弘仁五年に最澄が御前で法華経を講じたところ託宣より衣を賜ったという、古典説話とほぼ同じ内容で記されていることがわかる。

更に【表四】八幡宮関連文書などの記録類であるが、これらには全て、弘仁五年という年号が記されている。『僧綱補任抄出』と『宇佐宮年中斎会法文集』は、最澄が宇佐神宮に詣で法華経を講じたことのみを記しているが、それ以外の全てが、託宣により衣を賜ったことを記している。『八幡宇佐宮御託宣集』の（ホ）の欄に㊁としているのは、これは記載内容に託宣の記述は見られないが、文献の性格上託宣を受けていることが明らかであり㊁と記した。そのため、これらの文書類には、最澄が弘仁五年に渡海安全が成就したお礼に宇佐神宮を詣で法華経を講じた際、託宣を受け衣を賜ったという一定の流れで記されていることがわかる。

以上、諸書に見られる類話の記述内容を比較してみると、古典説話や大師伝・八幡宮関連文書の類は、一部に年号や法華経を講じた結果などの異同が見られるが、ある程度共通の内容を記しているのに対して、『直談因縁集』のみが、それらと大きく異なっていることがわかる。それは『直談因縁集』のみ、（八）草木の感応、（二）宝塔の出現、（ホ）法華経を講じた後金色の仏の出現、という記述内容を持っているためである。

それにしても、最澄の宇佐神宮参詣説話に、そのような内容が結びついていったのには、どのような背景があったのだろうか。直談系の説話との比較を行いながら考察を行っていく。

四、直談系の説話

先行研究に於いて、さながら法華経説話のインデックスの体をなしていると位置付けられる『法華経直談鈔』[注6]四本―三六話には、最澄が延暦寺を建立した際の説話として、次のような話を記している。（私に本文を書き下し、会話にはカギ括弧を付し、送り仮名等を補った場合は括弧を付した）

伝教大師、延暦四年七月二十六日ニ、初（メ）テ叡山ニ登（リ）給（フ）ニ、彼（ノ）山ノ東ニ當（タリ）テ、一（ツ）ノ岩尾有（リ）、其（ノ）上ニ、一人（ノ）化人現（レ）玉ヘリ、其（ノ）長（サ）、一丈餘（リ）ニシテ、肩ニ金色ノ光有（リ）、化人云（ク）、「此（ノ）山ハ、是（レ）断惑ノ聖者ノミ居（ル）所ナリ、汝ハ何ノ所ヨリ来（ル）カ」、大師答（ヘテ）云（ク）、「我ハ昔、霊山ノ法花ノ聴衆タリ、重玄門（ニ）入リ、倒取凡事ニシテ、衆生（ヲ）利益（センガ）為（ニ）、此（ニ）来（ル）也」ト云ヘリ、重（ネ）テ問（ヒテ）云（ハク）、「何ノ所用有（リテ）此ニ来ルカ」、大師答（ヘテ）云（ハク）、「我、此（ノ）山（ニ）於（テ）、寺院ヲ建立シ、仏法ヲ弘通（セ）ンカ為ナリ」（ト）云ヘリ、大師、又化人ニ問（ヒテ）云（ハク）、「何ナル人ニテ御座（シマス）カ」、化人答（ヘテ）云（ハク）、「今此（ノ）三界悉（ク）是（レ）吾子」ト云ヘリ、此ノ時、天ヨリ曼陀羅華雨（リ）、六種震動シ、宝塔虚空ニ湧（キ）現（ル）ルナリ、夫（レ）ヨリ、彼（ノ）在所ヲ塔ノ下ト名（ヅクル）ナリ、其（ノ）時化人云（ハク）、「汝（ハ）此（ノ）山ニ於（イテ）、仏法ヲ弘通セハ、我又守護（ス）ベキ」御約束有（リ）テ、即（チ）天（ニ）昇（リ）玉フナリ、サテコソ、大宮、権現本地ハ教主釈尊ニテ御座（シマス）ト知（リ）玉フナリ、

これによると、最澄が初めて比叡山に登った時、金色の光を放つ化人と出会う。最澄がその化人に対し、比叡山に寺院を建立したい旨を伝えると、空に宝塔が出現する。同様の話は『法華経直談鈔』八本―二二話にも、ほぼ同じ内容で記されている。それらを、前に示した（イ）から（ヘ）の項目によって整理すると、【表五】のようになる。

【表五】

文献名	（イ）	（ロ）	（ハ）	（ニ）	（ホ）
法華経直談鈔　四―三六	※	×	×	○	甲
法華経直談抄　八―二二	※	×	×	○	甲

【表五】の（イ）で※としたのは、どちらも年号を「延暦四年」とするからである。このように年号や、舞台となる場所が宇佐神宮と比叡山で異なるだけでなく、法華経を講じていない点など重要な記述の違いもあるが、『直談因縁集』所収の説話との間に類似点のあることが注目される。さらに、『今昔物語集』及び『法華験記』では、宇佐神宮に参詣し御

前で法華経を講じ託宣により衣を賜ったことが契機となり、薬師像を造り延暦寺を建立したとあるが、『法華経直談鈔』でも同様に、金色の化人との出会いや宝塔の出現が比叡山延暦寺の建立の契機となっており、どちらも延暦寺の建立説話となっていることは看過できないであろう。

五、宝塔の出現について

次に、（ホ）宝塔の中に仏が出現するという項目であるが、これは「見宝塔品」について説く際に、よく見られる記述である。例として『梁塵秘抄』[注7]の「宝塔品」五首を挙げる。

一〇五　霊山界会の大空に、宝塔扉を押し開き、二人の仏を一度に、喜び拝み奉る

一〇六　宝塔出でし時、遥かに瑠璃の地と為して、瑪瑙の扉を押し開き、分身仏ぞ集まりし

一〇七　宝塔出でし時、須弥も鉄囲も投げ捨て、遥かに瑠璃の地と為して、分身仏ぞ集まれる

一〇八　十方仏神集まりて、宝塔扉を押し開き、如来滅後の末の世に、法華を説き置き給ひしぞ

一〇九　法花経暫しも持つ人、十方諸仏喜びて、持戒頭陀に異ならず、仏に成ること疾しとかや

このように『梁塵秘抄』では、虚空に宝塔が出現するというモティーフを、視覚的にダイナミックに描いており、直談系の説話での描かれ方と共通するものがあると言えるのではないだろうか。

してみると、『直談因縁集』所収の説話は、【表二】から【表四】に挙げた最澄の宇佐神宮参詣説話において「託宣により衣を賜る」という内容のものが、『法華経直談鈔』に見られる「金色の化人と宝塔の出現」という記述、もしくは「見宝塔品」についてよく見られる、空に宝塔が出現しその中から仏が現れたという言説と入れ替えられたと考えられる。つまり、最澄が宇佐に詣でた際の説話の多くに「託宣により衣を賜った」とあるものを、『直談因縁集』では、「宝塔が出現し金色の仏が現れた」という、「見宝塔品」に纏わる言説に多く見られる内容に入れ替えることで、より「見宝塔品」の教えを伝えるのにふさわしい形として、直談の場に用いたのではなかろうか。

六、草木の感応について

次に、最澄が法華経を講じると草木が感応したという項目についてであるが、これは、【表二】から【表五】の（二）の項が全て×となっているように、『直談因縁集』以外には全く見られないものである。しかし、この最澄が法華経を講じると草木が感応したという記述が、全く類例のないものであるというかというと、そうとも言い切れない。なぜなら、宇佐神宮とともに、最澄が唐に渡る際、渡海安全を祈願し立ち寄ったとされる宝満山竈門寺から程近い、豊前路（田河道）[注8]の駅の一つであった香春にある香春神社に、最澄が詣でたとの記録があり、それとの関連が想起されるからである。

「香春神社御縁起」[注9]には、最澄が宇佐神宮に詣でた後、香春神社にも立ち寄り渡海安全の祈願をしたことが、「舊説曰」などとしながら、数種の文献から抜粋し並べて記載されている。その中で、『続日本後紀』[注10]から抜粋された「香春神社御縁起」の記事を次に掲げる。

続日本後紀曰、承和四年十二月庚子日、大宰府言、管豊前国鷹羽郡息長大姫大目神忍骨神豊比賣神、惣是三社元来石山而土木無、至延暦年中唐請益僧最澄躬至此山、祈願縁神力得渡海即於山下為神造寺讀経、尓来草木蓊鬱、神験如在、毎有水旱疾疫之灾、郡司百姓之祈祷、必蒙感應、年登人壽、異於他邦、望預官社以表崇祠許之

私に傍線を付した「為神造寺讀経、尓来草木蓊鬱」の記述にあるように、最澄が神の為に寺を造り経を唱えたところ、草木が生え亘るようになったとあり、『直談因縁集』に見られる草木の感応の様子とは少し異なるが、最澄の読経により草木が感応したことを記している。

また、この香春神社についての記事と関連して、前掲の『今昔物語集』の話の続きに、春日社[注11]で法華経を読むと、紫雲が覆ったとする記述が見られ、注目される。

亦、春日ノ社ニ詣デ、神ノ御前ニシテ法華経ヲ講ズルニ、紫ノ雲、山ノ峰ノ上ヨリ立テ、経ヲ説ク庭ニ覆ヘリ、而ル間、願ノ如、此ノ朝ニ天台宗ヲ渡シテ弘メ置ケリ。

そこで【表二】から【表五】に挙げた文献から、草木が生え亘ったり紫雲が覆ったりした記述のあるものを取り出しまとめると、【表六】のようになる。

【表六】（記述のあるものに○を付した）

文献名	草木	紫雲
三宝絵　下		○
今昔物語集　十一―十		○
伝教大師伝		○
伝教大師行状記		○
叡山大師伝	○	○
法華験記　上―三		○
拾遺往生伝　上―三		○
日本高僧伝要文抄	○	
私聚百因縁集　七―六		○
元亨釈書　巻一	○	○
叡岳要記　上（延暦寺根本神宮寺記）		○

改めて確認してみると、『日本高僧伝要文抄』や『叡山大師伝』、そして『元亨釈書』には、香春神社に詣でた際に草木が生え亘ったという記述が見える。

七、地元に残る最澄伝承

この最澄が香春神社に詣でた話は、在地伝承として今なお地元で語り継がれている。古い地元の記録を多く伝える、白鳥山成道寺[注12]の縁起の冒頭部には、成道寺は最澄が天台別院十六伽藍の一つとして創建されたという記述がある。

『田川市史』[注13]が、最澄の田川地方における天台別院建立についてまとめたところによると、延暦二十三年、最澄が入唐求法に際し、宇佐神宮と香春神社に詣でて、渡海安全の祈誓をこめ、翌二十四年に帰朝したのち、再び香春社に至り、無事に帰朝できた恩に報いるため、天台別院十八伽藍を建立したとしている。しかし、最澄建立の十八伽藍の随一と伝えられてきた豊前天台寺では、遺跡発掘の結果、伽藍配置や出土した新羅系の瓦から、奈良時代の創建ということが明らかとなり、最澄が建立したという伝承は否定されることになったが、この田川市に残っている最澄の仏教寺院創設譚は、古くからあった仏教寺院に、その後に天台宗が広まった影響から、最澄の仏教寺院建立譚と結びつき、様々な文献に書き記されていったものであることがわかる。

また、田川市には、「経塚」という地名が残っていて、『田

川市史』民俗篇には、次のような地名伝承についての解説がある。

経塚、上伊田、川沿いの岩石の切り崩されたところにあった。弘仁年間に伝教大師が唐より帰朝し、豊前・豊後に十八ヵ所の天台別院を建立し、彦山金剛窟に籠もり久しく修法して法華経を書写したのち、香春神宮院で七日間の講莚を開き、経本を壷に納めて宗法に則り各方面の地を選んでこれを埋めた。この経塚はその一つである（大正初年彦山川改修工事の際に若宮の岩鼻より経筒を発掘、成道寺に保管されている）。

九州に於ける経塚は、十一世紀後半から出現し、十二世紀の中ごろに終焉を迎えたことが発掘調査より明らかとなっており、[注14] この経塚の出土も、この地方に伝わる最澄による仏教寺院建立譚の一つとして結びついていったのだろう。このような在地伝承が、『直談因縁集』へと取り込まれていったと考えてよいのかどうかは容易に判断できるものではないが、その可能性を無視することもできまい。

八、まとめ

『直談因縁集』の説話については、所収されている説話の舞台となった地域や、書写者である舜雄の活動遍歴などから、関東の談義所が深く関わっていることが、先学により明らかとなっている。そこにはやはり、九州にまつわる説話は、極めて数が少ない。それらを考え合わせると、北部九州に纏わる最澄の宇佐神宮や香春神社への参詣説話が、宇佐での出来事なのか、香春での出来事なのか、在地に残る伝承ほど、厳密に土地の区別をされず、関東の談義所などで利用されていたのではないかと想像される。

なお、最澄と宝塔とを結びつけたものとして、「六所宝塔」[注15] というものが考えられる。六所宝塔については、土田充義氏の『八幡宮の建築』[注16] に詳しいので、次に引用する。

東国から帰った最澄は、弘仁九年四月二十一日に、六大宝塔院建立の祈願を立てた。宇佐神宮寺に建立する多宝塔もその一つである。実際には建立されなかったが、計画だけはされた。

天台伝教大師の去弘仁八年の遺記に従って、衆生が仏

門に入らんが為に願いとして、六〇〇〇部の法華経を写して六基の宝塔に納めることにした。六基の宝塔は叡山東西塔・上野・下野の国、筑前竈門山、豊前宇佐弥勒寺に建立されることになり、竈門山の宝塔が承平三年に完成し、残るは宇佐弥勒寺の宝塔のみとなった。ところが寛平年間に写した二〇〇部を焼いてしまったので、箱崎神宮寺に新たに一〇〇〇部の法華経を写し、一基の宝塔を建立することになり、承平五年より工事を始めた。宇佐弥勒寺は六基の宝塔の一端を担えなかったが「彼宮此宮雖其地異、権現菩薩垂迹猶同」と述べる如く、同じ神を安置する八幡宮であった。宝塔は多宝塔のことであり、どのように使われていたかというと「上層安置千部経王、下壇令修法花三昧」と述べるごとく、多宝塔の上層には一〇〇〇部の法華経を納め、下では法華三昧の修行をした。

竈門山の宝塔の跡ではないかとされる遺跡は、昭和五十六年に小西信二氏によって発見され、[注17]現在も太宰府市教育委員会などにより発掘作業が進んでいる。そして現在散逸してしまった六所宝塔と最澄の遺徳とを偲び、宝満山の宝塔跡と宇佐神宮とにそれぞれ宝塔が建立され、二〇〇九年一一月一六日には宝満山で、翌十七日には宇佐神宮で天台宗による落慶法要が営まれた。これは、天台宗開宗一二〇〇年を記念し、最澄が創建した時の趣旨に基づき、国家の安泰と世界の平和を祈る聖蹟として石造の宝塔を建立し、中に法華経を納めたものである。[注18]

田川に於ける伝教大師の伝説と同様に、六所宝塔についても直談系の説話とどのような関わりがあるのか容易には掴みがたいのであるが、こうした伝承世界を背景に、最澄と宝塔とが結びつき、最澄の宇佐神宮参詣説話が、見宝塔品の教えを伝えるのによりふさわしい説話として作り変えられ、直談系の説話に利用されていったのではないだろうか。

注

注1　主な研究書として、廣田哲通氏『中世仏教説話の研究』（勉誠社、一九八七年）、廣田哲通氏『中世法華経注釈書の研究』（臨川書店、一九七九年）、中野真麻理氏『一乗拾玉集の研究』（臨川書店、一九九八年）、阿部泰郎氏他『日光天海蔵　直談因縁集　翻刻と索引』（和泉書院、一九九八年）などがある。論文に関しては紙幅の都合上一つ一つを挙げることは出来ないが、本稿では特に、近本謙介氏の一連の御論文「直談の説話と位相――日光輪王寺天海蔵『直談因縁集』をめぐって――」（『山辺道』第四一号、一九九七年）、「話型を同じくする物語の再編――直談の因縁をめぐる――」（『仏教文学とその周辺』

和泉書院、一九九八年）、「輻輳する伝承の層――『直談因縁集』と中世物語・語り物文芸――」（『古代中世文学研究論集』第三集、和泉書院、二〇〇一年）、「室町の学芸とお伽草子」（『お伽草子　百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）及び、小林直樹氏「唱導用説話集における説話連関――『直談因縁集』をめぐる――」（『大阪市立大学文学部紀要人文学研究』四八―一〇、一九九六年）、大島由紀夫氏「「濡れ衣」説話の展開」（『学習院大学国語国文学会誌』第三一号、一九八八）、渡辺麻理子氏「談義書（直談抄）の位相――『鷲林拾葉鈔』・『法華経直談抄』の物語をめぐって――」（『中世文学』第四七号、二〇〇二年）、箕浦尚美氏「談義と室町物語――真宗の談義を中心に――」（『日本古典文学史の課題と方法――漢詩　和歌　物語から説話唱導へ――』和泉書院、二〇〇四年）、箕浦尚美氏「談義唱導とお伽草子」（『お伽草子　百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）恋田知子氏「室町の道成寺説話――物語草子と法華経直談――」（『説話・伝承学』第一五号、二〇〇七年）などを参照した。

注2　引用本文は、廣田哲通氏・阿部泰郎氏・田中貴子氏・小林直樹氏『日光天海蔵直談因縁集　翻刻と索引』（和泉書院、一九九八年）による。

注3　引用は新編日本古典文学全集による。

注4　以下の文献を比較検討に用いた。『三宝絵』（新日本古典文学大系）、『今昔物語集』（新編日本古典文学全集）、『宝物集』（新日本古典文学大系）、『水鏡』（国史大系）、『古今著聞集』（日本古典文学大系）、『伝教大師伝』（佐伯有清氏『伝教大師伝の研究』吉川弘文館、一九九二年）、『比叡山元初祖師行業記』（『伝教大師全集　第五』比叡山図書刊行会、一九二七年）、『伝教大師行状記』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）、『叡山大師伝』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）、『法華験記』（日本思想大系）、『拾遺往生伝』（日本思想大系）、『日本高僧伝要文抄』（大日本佛教全書）、『私聚百因縁集』（古典文庫）、『元亨釈書』（大日本佛教全書）、『叡山容記』（群書類従第四三九）、『僧綱補任抄出』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）、『宮寺縁寺抄』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）、『東大寺八幡験記』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）、『八幡宇佐宮御託宣集』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）、『宇佐宮年中斎会法文案』（『宇佐神宮史』資料篇巻二）

注5　『今昔物語集』などでは延暦二十四年に参詣したとあるが、実際は弘仁五年が正しい。

注6　渡辺守邦氏「直談鈔と説話」（『解釈と鑑賞』四九巻二号、一九八四年）。本文は『法華経直談鈔』（臨川書店、一九七九年）を参照した。

注7　引用は新日本古典文学大系による。

注8　古代の道路については、木本雅康氏『古代の道路事情』（吉川弘文館、二〇〇〇）、中村太一氏『日本の古代道路を探す』（平凡社、二〇〇〇）、木下良監修建部健一著『完全踏査　続古代の道』（吉川弘文館、二〇〇五年）、金田章裕氏・木下良氏・立石友男氏・井村博宣氏編集『地図で見る西日本の古代』（平凡社、二〇〇九年）などを参照した。

注9　『宇佐神宮史』資料篇巻二を参照。

注10　『続日本後紀』には『香春神社御縁起』と同文の記述があり、そこから引用したものと思われる。

注11　諸注、奈良の春日社ではなく香春社を指すとしている。よってここに地名の異同は無いものとした。

注12　成道寺はこの他に『平家物語』巻六「小督」の章段の後日譚

を伝えている。拙稿「軍記物語とお伽草子」（『お伽草子　百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）及び「福岡県田川市成道寺蔵『小督局畧縁記』の詞章と翻刻」（『文献探究』四七号、二〇〇九年）、「小督説話の展開――在地における平家伝承の一考察――」（『伝承文学研究』第五九号、二〇一〇年）

注13　『田川市史　上巻』（田川市、一九七四年）『田川市史　民俗篇』（田川市、一九七九年）などを参照。

注14　経塚については主に、関秀夫氏『経塚の諸相とその展開』（雄山閣出版、一九九〇年）及び、小田富士雄氏・平尾良光氏・飯沼賢司氏共編『経筒が語る中世の世界』（思文閣出版、二〇〇八年）などを参照した。

注15　『叡岳要記』（群書類従第四三九）所収の「天台法華院」、『延暦寺護国縁起　巻中』所収の「叡山大師大日本国中所造六所宝塔縁起文第一二」、『天台霞標』所収の「六所造宝塔願文」などに見られる。

注16　『八幡宮の建築』（九大出版会、一九九二年）より抜粋

注17　竈門山の六所宝塔及び最澄の参籠については、小田富士雄編『宝満山の地宝』（財団法人太宰府顕彰会・太宰府天満宮文化研究所、一九八二年）、『太宰府市史』建築・美術工芸資料編（太宰府市、一九九八年）、『太宰府市史』考古資料編（太宰府市、一九九二年）、森弘子氏『宝満山の環境歴史学研究』（財団法人太宰府顕彰会、二〇〇八年）などを参照した。

注18　『天台ジャーナル』第八一号（二〇〇九年一二月発行）

【付記】本稿は、伝承文学研究会第三六四回東京例会及び、福岡女学院大学第一二回地域文化研究会における口頭発表に基づくものです。席上、貴重な御教示を賜りました先生方に、深謝申し上げます。また、資料の閲覧及び田川地方の実地踏査に際し多大なるご協力を下さいました、成道寺住職畑野孝之氏に、心より御礼申し上げます。

（もり　さとこ・本学大学院博士後期課程）